

第一展示室

(看板：第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期、第Ⅳ期)

第Ⅰ期:

13世紀末から14世紀初頭

初期の構造は、最下層の発掘調査で発見されました。この構造は、支柱が地面に掘られた穴に直接埋め込まれており、おそらく茅葺き屋根で覆われていました。地面は平らに均されており、土と石の単純な支え壁がありましたが、石の防御壁はありませんでした。遺構の周りに立てられた木の棒の柵が、敵の侵入を防いでいました。建物の支柱の穴と小さな柵の支柱の穴を比べると、建物の支柱の方がはるかに大きいため、容易に判別できます。同じ層で、この地域で作られた陶器の破片に加え 13 世紀後半から 14 世紀初頭にかけて作られた中国の陶磁器の破片が見つかったため、この年代層で見られる建物はほぼ確実にこの時期に建造されたことが分かります。この時期は、12 世紀から 15 世紀まで続いたグスク時代という時代区分内に位置付けられます。琉球の城（グスク）のほとんどはこの時代に築られました。この時代には、政治的な組織形成と経済的な繁栄が著しく推進され、現地で発見された陶磁器が証明するように中国との貿易も盛んになっていきました。

写真のキャプション：

地面に埋めこまれた支柱と木の柵

地面に埋めこまれた支柱の穴

木の柵の穴

建築方法

土と石でできた支え壁

土の構造物

+++

第Ⅱ期:

14世紀初期から中期

今帰仁城を象徴する特徴のひとつ、暗い色の琉球石灰岩で作られた巨大な石垣の建築は、この時期に始まりました。城の最上階である主郭の北側に、石と土でできた大きな基壇が築られました。この上に、正殿という南向きの木造の大殿堂が建てられました。基壇全体に、屋根付きの回廊が取り付けられ、さらに、正殿から東西に延びる屋根付きの廊下も設置されました。その結果、最終的に、中国に原型が見られるような御殿ができました。当時中国・韓国・日本では、この種の格の高い建物には、通常瓦の屋根が付けられていました。しかし、発掘現場ではどの層にも瓦は見つかっていません。このことは、今帰仁城正殿のような重要な建物でさえ、屋根には傷みやすい茅や竹、木の板が使われていたことを示唆しています。

写真キャプション：

基壇に建てられていた回廊付きの建物の跡

発掘調査の様子(磁器の碗)

+++

第 III 期:

14 世紀後期から 15 世紀初頭

この時期は、今帰仁城の最盛期でした。中国の明時代の記録には、今帰仁を居城として北山王国を統治していた歴代の王が幾度にもわたって送った貿易使節の訪問について書かれています。前の時期に築かれた基壇が埋められて、主郭の平らな部分が拡大されました。この時期より前の建物とは異なり、新しい正殿の柱は、中国・韓国・日本で見られるものと同様、基礎石の上に置かれており、新しい建築技術が伝わっていたことを示しています。石の防御壁のそばには建物がもうひとつ建てられました。この時期は、北山王が南部の敵に敗れたことで終焉をむかえました。北山を滅ぼした南部の敵は、琉球全土にまたがる統一王国を創設しました。今帰仁の独立を終わらせた戦闘の際、城の木造の建物群は破壊されました。

写真キャプション:

基礎石

基礎石および切り出された岩が自然に露頭したところ

石の階段

+++

第 IV 期:

15 世紀初期から 17 世紀初頭

1416 年、今帰仁城とその周辺の土地は、統一琉球王国の支配下に置かれました。この期間中、今帰仁は琉球国王が任命した監守と呼ばれる官職者によって統治されていました。この時代の地層の発掘調査により、城の主郭のある階の中心に破壊された建物に替わる新しい正殿が建設されたことが明らかになりました。発掘された基礎石は、この建物の面積が奥行約 9 メートル、幅約 14.5 メートルであり、以前のものよりかなり大きかったことを示しています。これ以前の建物と同様、おそらく屋根は茅か竹、木の板で葺いてありましたが、その痕跡は全く残っていませんでした。琉球・アジア諸国間の貿易は、この期間中、地理的にも交易品の流通量と価値においても大幅に拡大しました。このことは、発掘現場で見つかった陶磁器に反映されており、その中には上等な中国の磁器や、アンナム（ベトナム）、タイ、韓国などからの品々が含まれています。当時今帰仁の近くの港はまだ海外貿易に使われていましたが、これらの品々のほとんどは那覇の港を経由してもたらされたと考えられています。この期間は、1609 年、日本の九州・薩摩藩による侵略に琉球王国が敗れたことで終わりました。

写真キャプション:

正殿の基礎石

タイから伝わった陶器の破片(土中)